

第二卷

㊦ 新潮社版

印刷／昭和五十年二月二十日
発行／昭和五十年二月二十五日

平野謙全集 第二卷

著者／平野謙

発行者／佐藤亮一

発行所／株式会社新潮社 郵便番号一六二 東京都新宿区

矢来町七一 電話東京二六六一五一（業務）

二六六一五四一一（編集） 振替東京四一八〇八

印刷所／塚田印刷株式会社

製本所／神郵便番号 株式会社

定価／株式会社新潮社



乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

平野謙全集／第二卷 ■ 目次

島崎藤村

藤村の生涯	10
破戒	17
春	36
家	39
新生	45
晩年の藤村	108
*	
ふたりのすがた	121
わたくしごと	125
藤村の新資料	128
藤村の文体	130

藝術と実生活

I

問題の発端

.....

138

私小説の二律背反

.....

143

II

森 鷗 外

.....

164

田 山 花 袋

.....

185

島 崎 藤 村

.....

207

徳 田 秋 声

.....

223

永 井 荷 風

.....

247

志 賀 直 哉

.....

263

夏 目 漱 石

.....

275

III

演技説修正

.....

323

於母影

被害者と加害者	333
藝術家の自由	339
日常性の恢復	343
愛とエゴイズム	346
疵は癒されるか	351
小 熊 秀 雄	358
菊 池 寛	361
太 宰 治	363
宮本百合子	365
永井荷風	368
外 村 繁	370
宇 野 浩 二	372

秋田雨雀	374
正宗白鳥	375
十返肇	385
高見順	393
亀井勝一郎	409
山本周五郎	412
勝本清一郎	414
壺井栄	417
広津和郎	418
日沼倫太郎	427
中山義秀	429
伊藤整	436
三島由紀夫	444
志賀直哉	449

貴司山治	浅見淵	阿部知二	椎名麟三	*	作家の自殺	川端康成	火野葦平	平林たい子
.....								
482	476	474	473		467	460	457	452

平野謙全集

第二卷

島崎藤村

——人と文学——

藤村の生涯

藤村島崎春樹の七十余年にわたるながい生涯を考えると、そこには陰忍と狂熱との不思議に交錯した主線をたどることができるといえる。藤村ほど石橋をたたいてわたった要心深い人もいなければ、また藤村ほど大胆に身をすててその生涯の曲り角を通過した人もないように思われる。その大胆にして細心な生涯は、よくながめれば、さまざまな謎と教訓にみちている、といえるのである。

最初、よく知られているように、藤村は『若菜集』一巻の詩人として、近代日本の朝明けを浪漫的にうたいあげることから出発した。晩年は『夜明け前』という歴大な歴史小説を、忍耐そのもののような態度で書きあげた。浪漫的な詩人から冷厳な散文家へというコースは、いわば文学者

のたどるべき最も尋常なもので、とりたてていうこともないが、藤村の場合は、それさえもなにか特別のような気がする。狂熱の詩人としてわが身を破らず、リアリティックな小説家としてよく大成し得たことさえ、普通のことではないかにながめられるのである。岩野泡鳴という詩人・小説家は、日本にはめずらしい型破りの生涯を送って、いささかもはばかりのころのない人であった。森鷗外という科学者・文学者は日本では稀にみる合理的知性の所有者として、その生涯を冷静に統制し得た人である。藤村は泡鳴でもなければ鷗外でもなかった。ということは、泡鳴的な側面も鷗外的な側面も兼ね備えていたといえはいえるにもかかわらず、泡鳴にもならず鷗外にもならず、狂熱にして忍耐強い人として終始した、というほどの意味である。

「親ゆづりの憂鬱」という言葉を、藤村は独特の意味をこめて、しばしば語っている。この簡単な言葉は、藤村の場合特徴的である。よく知られているように、藤村の父島崎正樹は座敷牢のなかで狂い死した人である。藤村の長姉高瀬園も病院において精神錯乱のうちに亡くなった人である。藤村縁者の現存者のなかには、精神病理学を専攻して、学者として世にたっている人が二人ある。このような事実と親ゆづりの憂鬱という言葉とは無縁のものではない。この簡単な言葉のうちに、藤村は自己の血統と運命をこめた

のである。明治学院の初年級時代、藤村はしゃれた洋服を仕立てて、青と白とはでな靴下をはき、美しい少女たちの集まる集会や文学会などにうきうきとして出入した。当時藤村は学友たちから「いかげやの天秤棒」とあだ名されるほどオッチョコチョイな当世流の才子めいた少年であった。それが一朝にして寡黙にして陰鬱な青年と化してしまつたのである。無論、少年から青年への激動期にあつては、なにびとも性格の一変するような変貌をとげることはめずらしくない。しかし、そういう一般的な場合もこめて、藤村のそれは、おのが運命に対する怖れと憚りの予兆ないし自覚ではなかつたか。すくなくとも、藤村の自覚的な生涯は「親ゆづりの憂鬱」という言葉に圧縮された、狂熱にして堅忍な生活につらぬかれていた、といつてよからう。

藤村は明治五年（一八七二年）三月二十五日、筑摩県八大区五小区馬籠村に、島崎正樹の四男として生れた。島崎家は代々馬籠にあつて、庄屋・本陣・問屋を兼ねた旧家であつた。父正樹はその十七代目の家長にあたり、平田派の国学者の一人で、松翠園静雅と号して和歌などもつくつた。しかし、明治維新という大変革期に際会した彼は、「静雅」どころではなく、狂熱のうちに空しく費やされた悲劇的な生涯をおくらねばならなかつた。正樹の最期は、さきにふれたように、「慨世憂國の士をもつて発狂の人となす。豈

悲しからずや」と叫びつつ生涯を閉じた人である。藤村はそのような父の氣質を最も色こく受けついでようである。

七人兄妹の末子に生れた藤村を、父は「彼奴は一番學問の好きな奴だで、彼奴だけには、俺の事業を継がせにやならん」と、ひそかにその将来に期待していたらしい。おそらくそのためだろう、数え年十歳の藤村は、信州の山国から遠く東京にまで遊學させられることとなる。小さなカバンに金米糖（きんまいとう）をいれて、ワラジきでいくつかの峠を越え、沓掛から乗合馬車にのつて、小さな藤村はようやく七日目に東京にたどりつくことができたという。明治十四年のことである。爾來、藤村は明治三十二年四月に小諸義塾の教師として赴任するまで、主として東京という大都會のなかにその少年期、青年期をすごしたのである。無論、仙台に赴いて教鞭をとるかたわら、『若菜集』一巻におさめられた詩をうたいあげた仙台時代がそこにはさまつてはいるが。

しかし、藤村の生活は、花やいだ都會ふうのものではなく、簡素な田舎ふうの生活様式に終始していた。また、藤村は十歳のときに父母の膝下をはなれてから、その父と相見えることなくして終つたらしい。上京してきた父親に一度対面しただけで、その臨終にもその葬儀にもついに帰國することなくして熄んだらしい。普通の意味からいえば、藤村は、その父とは血縁うすい子として終つたのである。

父は藤村十五歳のとき死去しているが、極言すれば、十歳という幼弱のみぎりに生き別れたままといいてもいい。しかも、その作品にもしばしば書いているように、亡き父に対する藤村の追憶の情は、ほとんど異常といってもいいほどであった。ここにすでに藤村の生涯の謎のひとつがある。十歳にして故郷をはなれ、都会ふうの生活を少年期・青年期にすごした藤村が、なぜ終生田舎ふうの生活様式を固執したか。十歳にして生き別れた父親の面影を、なぜあんなに生涯追慕したか。いや、その前に、東京遊学という一見なにげない伝記の一節をとりあげてみても、すらりとのみこみにくい面がある。向学心に富む少年を東京に遊学させてやるという発意は、いかにも親の慈悲でもあったろう。しかし、普通の少年ならまだ父母の膝下に甘えて育つ十歳という年頃に、藤村だけは遠く肉親をはなれ、他人の眼を気にしながら暮して、おそらく夏休みに帰省することともかなわなかったという事実は、そんなに当り前のこととも思われない。後年、藤村はフランスに留学するが、それが普通の意味での留学とは趣きを異にしていたのとはほぼ同じように、東京遊学も普通のそれとはなにか事情を異にしていたのではなかったか。島崎家という旧家には暗くよどんだ血が流れており、その暗鬱な家庭の雰囲気から隔離するため、藤村は幼くして東京へ遊学させられたのではな

かったか。近年明らかにされた島崎家の家庭事情によれば、藤村のすぐ上の兄友弥は母親のあやまちによって生を享けた不幸な人であった。しかし、あやまちは母親の側にだけあったのではない、父親もまた近親の女性とあやまちに陥ったことがあったという。それらの事情と藤村の東京遊学とを直接に結びつけるのははばかり多いが、なにか私には藤村の東京遊学そのものにしてからが尋常のものとはちがつているように思えてならない。藤村が父親の生涯について思いめぐらしたのは、フランス留学中のことであった。おそろしい、しかし、なつかしい人としてその父を追懐する藤村の内部には、尋常の父親追慕とは異なったものがあったはずだ。いずれにしても、都会育ちの藤村が終生田舎ふうの生活様式をまもったことのなかには、藤村独特の自己抑制の念がはたらいていたにちがいない。

小諸義塾の一教師として赴任したときも、藤村は寒い山国の生活などまるで経験のない新妻をたずさえて、信州に赴いたのである。おそらく『若菜集』の詩人藤村の名に娘らしいあこがれを持ち、都会での結婚生活をのぞんでいたにちがいない新妻を説きふせて、さみしい田舎教師として赴任しなければならなかったどんな必要が、そのときの藤村にあったのだろうか。ここにも藤村評伝のひとつの謎がある。鉄はあかきうち打て、という生活信条にしたがっ

て、藤村は新妻に困難な生活訓練をほどこそうとしたのかもしれない。しかし、私にはその結婚前に長兄が友弥をひきとらぬかと藤村に相談した事情が、やはり小諸への赴任と関係しているように思える。友弥の伝記はつまびらかではないが、青年期の放浪の果て、廃疾の身を近親に横たえるしかなかった人のようである。単に友弥のことだけではない、長兄に対する末弟としての藤村の態度は、封建的といわざるを得ぬ絶対服従のそれであった。自分たちだけの新しい家庭生活を築きあげるために、よくもしらぬ高原の生活をわざわざえらんだ藤村の決意のうちには、旧家の大家族主義からの離脱という希いがひそんでいたように思う。

そのほか『春』に描かれた藤村の恋愛や放浪の旅にしても、『新生』に描かれたフランス留学前後の決意にしても、よくわからない謎にみちている。しかし、それらの謎をつらぬく藤村の生涯は、異常な脱出の決意と堅忍な生活遂行との交叉にはかならなかった。そのような交叉の基調となったもののこそ、あの「親ゆづりの憂鬱」ではなかったか。無論、一人の人間の精神史をその片言をトッコにして割りきることは誤りであろう。わけても、藤村のような複雑な含みおおい生涯を簡単に割りきってみせる場合なぞなおさらである。しかも、なお私はそこに暗い宿命的なものを感じずにはいられぬのである。藤村の謎などという言葉もい

わばその宿命の別名にすぎない。

七年間の小諸義塾の田舎教師としての生活が、藤村をして詩人から小説家に更生させる直接の糧となった。七年のあいだ寒い山国の生活にながめ入った藤村は、最初の長篇『破戒』の稿をたずさえて山を下り、東京府下の西大久保に新しく居を定めたのである。『破戒』は明治三十九年三月に出版されたが、それが上梓されるや、日露戦争を通過した戦後文学の最初の新しい旗として、花々しく評価されたのである。処女長篇に文学者としての自己の運命を賭けた藤村の意気込みは、文字通り決死的なものであった。教師の職を辞し、幼い三人の子をひきつれて、東京に出た藤村は、起死回生の背水の陣をしいたのである。妻は栄養不良のために夜盲症となり、子はつぎつぎと死んでゆくという悲境にあつて、藤村は最初の長篇『破戒』を自費出版したのである。もしも『破戒』が文壇的に成功しなかったなら、藤村一家の運命はどうなっていたであらうか。無論、藤村は最悪の事態も予想していたにちがいない。しかも、自費出版という冒険を敢えてした藤村は、思いきった大胆と自恃をもつ人といわねばなるまい。だが、その大胆と自恃をつらぬくために、藤村は深い雪をふんで佐久高原に友人をおとずれ、ロシア艦隊の出没する日露戦争当時の津軽海峡をわたって行って、東京での生活と自費出版の見透し

をたてる用意と細心をも忘れなかった人である。

「さいわいにして『破戒』は文学的にも文壇的にも成功し、新しい小説家としての藤村の位置はここに確立した。単に藤村個人にとっただけでなく、自然主義文学のさきがけとして、『破戒』一篇は近代小説史上不動の地位を獲得したのである。」

戦後、映画にもなり劇にもなった『破戒』は人のよく知るとおり、生れながらにして特殊な運命を背負った瀬川丑松という部落出身の青年を主人公としている。小学校の教師という知的な青年たる主人公は、周囲の社会的偏見にいわば二重に傷つかざるを得なかった。単に外からの圧迫としてだけではなく、その圧迫に屈従する自我との内心のたたかいとして、丑松は二重に傷つかないわけにはいかなかったのだ。ここには幾重にも屈折しながら、藤村自身の特殊な運命が丑松という主人公に托して描かれてある、といえないこともない。主人公の環境そのものは、七年間田舎教師として寒い高原にとどまった藤村の実地の見聞をもととしてつくりあげられてある。しかし、ほかならぬ瀬川丑松という主人公をえらんだ作者の選択には、単なる見聞や観察をこえた藤村その人の運命感が仮託されてあった、といえるかもしれぬ。だが、その場合注意すべきは、その選択がまだ薄明の無意識のうちに遂行された、という事実だ

ろう。瀬川丑松に対する人間的共感とその社会的プロテストこそ、作者のモチーフにはかならなかった。ここに『破戒』一篇の清新なヒューマニズムの芽吹いている理由がある。

生れ素性をかくせと遺言した亡父の戒めと「我れは部落の民なり」と男々しく社会と対決する先輩の勇気とはさまれながら、一旦は自殺を想うまでに追いつめられた主人公も、ついに破戒の決意をつかむにいたる。その間の苦悶動揺には近代的な自我確立のたたかいが象徴されている。しかし、彼はその決意を板敷に額を伏せて許しを乞うみじめな姿においてしか、実現することができなかった。ここに主人公の宿命的な暗さがあり、作者その人の運命感も陰密のうちに二重うつしされてあったのだと思う。このような瀬川丑松の設定こそ、近代小説の正統なゆき方にほかなるまい。『破戒』が近代小説の白眉たる所以である。

『破戒』を書いて小説家たる地位を確立した藤村は、『春』『家』『新生』と、自伝的な長篇をつぎつぎと発表していった。しかし、『破戒』から『春』にいたる道が、果して近代小説のゆき方として正統であるかどうかは、いまでも議論のわかれるところである。日本における近代小説らしい骨格は、『破戒』から『春』への屈折のうちに流産したとみる見方と、『破戒』から『春』への道は藤村自身にとっ